小児科

副院長　統括部長　金澤正樹

１．部門目標

千葉県保健医療計画において示された千葉市の地域小児科センターとしての役割を担うべく、小児救急拠点病院として充実を図り、小児総合診療の幅を拡大し地域の小児医療に貢献します。１）内因系・外因系疾患を問わず、常時小児救急患者を受け入れます。２）最善の医療のため多職種によるチーム医療を実践します。３)健診（院内外）および予防接種の実施など小児保健診療へ参加します。４）1 次医療機関、3 次医療機関、消防局、保健所、児童相談所、千葉市医師会など他の関連機関と円滑な連携をし、地域医療を支援します。５）地域の小児食物アレルギー診療の基盤となるよう、食物経口負荷試験を実施していく。６）小児科専門研修基幹施設として小児科専攻医を指導・育成します。７）公開カンファレンスを開催して地域の小児医療の質向上に貢献します。８）千葉大学病院総合診療科専攻医、初期研修医、千葉大学医学部学生などの研修施設としても充実を図ります。９）小児の新型コロナウイルス感染症に対する診療体制を整備します。

２．勤務体制とスタッフ

①勤務体制

常時小児科医が小児救急患者を受け入れる体制になっています。夜間、土、日、祝日は、日勤・夜勤の小児科医が割り当てられ、常時小児科医が在院する体制となっています。日中は救急当番の小児科医が迅速に対応をしています。17 時から 22 時までの千葉市夜間応急診療を含む救急外来において、小児専従看護師による院内トリアージにより救急外来の適正化を図っています。緊急性が高い患者は、平日はシフト勤務医師が対応し、日・祝日は小児科救急外来担当医師が対応します。平成 30 年 2 月より千葉市夜間応急診療の前準夜帯を週 1 回月曜日（第 1 月曜日を除く）に、平成 31 年 2 月より千葉市夜間応急診療の深夜帯を週 1 回水曜日に小児科専攻医・千葉大総合診療科専攻医が担当しています。

②スタッフ

令和 2 年 4 月 1 日時点

院長	寺井　勝
副院長・小児科統括部長	金澤　正樹
部長	立野　滋
感染症内科部長	阿部　克昭
部長	高田　展行
部長	杉田　恵美
主任医長	加藤　いづみ
主任医長	森山　陽子
主任医長	大川　哲平
主任医長	吉田　未識
医長	小玉　隆裕
医長	鋪野　歩
医長	栗原　恵理佳
医長	寺中　さやか
医師	中島　聡
専攻医	山口　亮
専攻医	淺木　弓英
専攻医	吉野　忠怨

専攻医　　廣瀬　健陽
専攻医　　多胡　孟祐
専攻医　　中川　良太
専攻医　　村山　綾香
専攻医　　佐藤　瑠理香

令和２年３月に廣瀬陽介医師が退職され、東京女子医科大学八千代医療センター救急科に異動。光永可奈子医師が、千葉県こども病院アレルギー・膠原病科に異動。天野純医師が国立病院機構下志津病院に異動。他に、小児科専攻医が小児科専門研修のプログラムに沿い、異動があった。

③外来（令和２年４月１日時点）
専門外来
月曜：地引利昭・高田展行（循環器）、千葉大医師（内分泌）、武之内史子（小児外科）
火曜：千葉大医師（神経）、阿部克昭（感染症）、寺井勝・立野滋（循環器）
　　小原由紀子（小児外科）
水曜：田邊雄三・高梨潤一（神経）
木曜：寺井　勝（循環器）、亀ヶ谷真琴（整形外科）、橋本祐至（神経）
　　金澤正樹（代謝・消化器）
金曜：寺井　勝・立野滋（循環器）、加藤いづみ（アレルギー）、女子医大八千代医師（小児外科）
小児一般外来
　石和田文栄、杉田恵美、森山陽子、小玉隆裕、吉田未識、大川哲平、他

３．診療実績
外来延べ患者数：15,915 人（初診：3,540 人、再診：12,375 人）、紹介患者数：1,193 人
新規入院患者数

新規入院患者数	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度	令和 2 年度
小児科	1,941	2,132	2,272	2,083	2,202	1,461

救急車搬送受入数

	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度	令和 2 年度
小児科	1,010	1,251	1,564	1,724	1,716	1,127
小児科夜急診	827	799	727	617	641	188
小児科総数	1,837	2,050	2,291	2,341	2,357	1,315

〈主な入院患者の疾患別内訳〉
　新型コロナウイルス感染の拡大とその対策により、小児の傷病への影響がみられ、入院患者の疾患別内訳も明らかに変化しました。特に顕著なのはウイルス性の気道感染症が著明に減少したことでした。RS ウイルス感染やインフルエンザもみられませんでした。気管支喘息も 6 割に減少しました。相対的に尿路感染症が上位となりました。食物経口負荷試験検査は 547 件で上位ですが、例年より減少しています。COVID-19 の小児患者数は 56 名、平均在院日数は 5.29 日、平均年齢は 1.16 歳でした。
４．教育・研修・その他の活動
①教育・研修
　当院の小児科専門研修プログラムが日本専門医機構に承認され、基幹型病院として小児科専攻医の

専門研修を実施しています。令和２年度本院採用の小児科専攻医は２名でした。
　初期研修医延べ 21 名、小児科専攻医・後期研修医延べ 13 名、千葉大学病院総合診療科の専攻医延べ４名の小児科研修が実施されました。千葉大学医学部学生６名の小児科実習を行ないました。令和２年度末で千葉市小児科医会と共催している海浜病院公開カンファレンスは 269 回を迎えました。
　新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、公開カンファレンスはオンライン形式となり、継続しています。
②その他の活動
　千葉市の 4 か月健診、大網白里市の 4 か月健診、学校心疾患二次検診に参加しました。千葉市要保護児童対策地域協議会実務者会議に参加しました。

５．１年間の総括
　新型コロナウイルス感染の拡大の影響と思われますが、新規入院患者数と救急車搬送受入数ともに例年の６、７割に減少しました。外来患者延べ数も 1,5911 名で前年比８割に低下しました。また千葉市夜間応急診療に受診する患者が減少し、令和２年４月 20 日から時間帯が前準夜・準夜に短縮されました。
　一方で、小児病棟に新型コロナ感染者の受け入れ病床を設置し入院を受け入れ、陽性妊婦から出産した新生児に対応し、近隣の保育施設で集団感染が疑われれば、ドライブスルー方式で乳幼児の検体採取を実施するなど、これまでになかった診療について体制を整備する必要がありました。幸いなことに院内クラスターの発生はありませんでした。今後も新型コロナウイルス感染症の流行が終息するまで、公的医療機関としての使命を果たしていくことになります。
　コロナ禍で大きく変化したことは、新たなコミュニケーションツールが導入され、情報共有がオンライン化されてきたということです。行政との連絡は相変わらず書類が必要なことが多いですが、Zoom によるカンファレンスや多職種多機関の会議、小児科スタッフ全員を繋げるラインワークス、県レベルでのメーリングリストによるコロナ対策、そしてオンライン診療が導入されるかも知れないなど医療の情報技術が大きく前進したように思います。
　Post コロナの時代そして少子超高齢化時代を見据えて、経験したことのない波を乗り越えた１年でした。
６．今後の目標
　新型コロナウイルス感染症の流行が終息するまで、公的医療機関としての使命を果たしていくこと。次世代の小児医療を担う医師を育成するため、小児科専門研修施設としてよりいっそうの充実を図ります。小児医療において問題となっている移行期医療や社会的養護を要する貧困や虐待などの対応、重症心身障がい児者のケア、発達障害・ 精神・行動・心身医学的な診療に対し、地域の需要に応えられるように整備していきます。

小児科 HP：http://www.city.chiba.jp/byoin/kaihin/shinryou_syounika.html
海浜病院リクルートサイト：http://chibacity-kaihinhp-recruit.jp/